

---

# ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

イルカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

### 【Zコード】

Z9258Y

### 【作者名】

イルカ

### 【あらすじ】

俺はダンジョンを探索する探索家だ。夢はそうだな、もちろん男ならハーレム！それもだ、名声と実績で美女が寄ってくるハーレムだ、わかるか？

しかし問題が色々あるわけ。そう、質の悪いストーカー（美少女）に付きまとわれてるとか、ファミリーの神様が超美男子で女をみんな持つていつちゃうとか、な。

でもさ、未だ謎とされてるダンジョンの謎を解けば、絶対ハーレム完成だよな。

だから俺は今日もスマーリーの仲間とダンジョンに潜る。

## プロローグ

「前方にオーラークチーフが2体POP、右からはビッグブラッドバットが4体。ヤバイ、ヤバイよ囮まれる。」

サポートに徹してたチールが叫ぶ。

しかし前衛の俺とカルシュは今日の前のミノタウロスを相手にするので精一杯だ。

「マーリッシュュ、ベルサリア、魔法で迎撃。バックスは足止め、頼むぞ。」

俺はみんなに指示を出すが既に連続戦闘時間は1時間近い。そもそもみな、特に女性陣は体力の限界が近づいているだろう。

そろそろ退却を考えるべき時に来てるのかも、と思うが、まだそこまで追い詰められている訳でもなく中々決断できない。

「ダアアアアア

その時、危機に瀕すれば瀕するほど燃え上がるという難儀なスキル持ちのカルシュは一気に気合が入ったのか猛然とミノタウルスに切りかかる。たぶんスキル発動したな。

そのお蔭で長身カルシュの身長もある大剣が、ミノタウルスの堅い筋肉をやすやす切り裂き、右肩付近から右腕を切り飛ばすことに成功した。

ミノタウルスが絶叫と共に仰け反る。チャンス

「我まいしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ」

雷を剣にまとわりつかせながら動きの止まつたミノタウルスに突進する。

俺の唯一使える魔法、それがこの雷エンチャントだ。

自分の剣にしか使えない、詠唱が長い、持続時間が短い、燃費が悪いと四拍子揃つて使いにくいんだが、威力は絶大。

「うおおお

気合一閃、失われた右腕の箇所から一気に胴体を輪切りにする。

ちなみに今の俺ではエンチャントかかつてない状態だと、精々剣が食い込む程度の威力しか出せない。

「カルシュ、オークチーフとビッグブラッドバットに苦戦しているマーリッシュュ達の援護に向かうぞ」

「待つてマズイ、後ろでミノタウルスが2体POP中だよ。何とかしないと退路を断たれる！」

再びチールが叫ぶが、その叫びには先ほどよりはるかに危機感がこもっている。

危機がピークに達している現状で、チールはすでにミノタウルスへ向けて走り出している。たいして俺はエンチャントの効果時間すでに終了しており、剣にまとわりついていた雷は消滅。攻撃力は激減中だ。

いくらチールでも単独でミノタウルスを倒しきることは難しい。撤退を成功させることだけを考えねば全滅の危険性もある。

「つく、ミノタウルスは俺が足止めする。チールは魔石とドロップアイテムの回収、それが済みベルサイヤはかく乱魔法、同時に全員退却。14層への階段まで走れ。」

俺は素早く指示をだし、身をひるがえす。

「グオラウウウウ

直後、ミノタウルスのそれより遥かに大きな雄叫びと共に、ミノタ

ウルスの胸の急所、魔石の部分から巨大な手が生えた。2匹のミノタウルスはあっけなく消滅。

その手が握ったミノタウルスの魔石はすぐさま巨大な口へ運ばれ消えた。

「ら、ラノタウルスだと……」のタイミングで。

カールが隣で呟く。15層のフロアボスたるラノタウルス。サイのような顔と三本角を持つ巨大な人型モンスター。そう俺たちがこの場所で1時間も狩りを続けていたのは、こいつを待っていたからだ。しかし、これはタイミングが最悪。みな疲弊しておりオークチーフなど、雑魚とは呼べないレベルのモンスターを相手にした状態。ミノタウルスを一撃でぶち抜くこの怪物と戦えるだけの余力は到底持つてない。

不味い、ホントマズイ。これは、ヤバイって。

「全員即座に退却。走れ。」

もうアイテムとか魔石とかそんなものはどうでもいい。このままじやアレが来る。そしてまた取り返しが……

「はい。オイタはいけませんよー。私”を”愛する人に近づくなんて最低ですねー。」

場違いな甘い猫なで声。

と、同時にラノタウルスの体を幾筋もの銀光が通り抜ける。

「グオ？」

間抜けな声。そしてフロアボスたるラノタウルスは振り返る事もなく、あっけなく解体された。

「はい。私”を”愛するマイダーリン。無事？」

その女は軽やかにステップを踏みながら、俺たちが散々苦戦していたモンスターを一瞬で解体していく。

流石は現在、最強の一角とみなされる女剣士だ。この華奢に見える体にどれほどの力を内包しているのだろうか。

しかし、

「やつぱりもう来たのかよ・・・まあ助かった・・・けどよ」  
俺の疲れたため息が15層のフロアに染み込んでいった。

## プロローグ（後書き）

初投稿作品です。見づらご所も多々出でてくると思いますが、都度修正したいと思いますのでよろしくお願いします。

## 第一話

3時間かけてダンジョン1~5層から地上まで戻った俺達は入り口でいつたん解散した。

俺とチールは探索ギルドへ、他のメンバーはファミリーのホームへ戻り先にステータスの更新だ。

まあ、俺として疲れきつて（主に精神的に）いたのでホームへ戻りたかったのだが、ギルドの依頼を受けていた以上、ファミリーリーダーとして真っ先に報告する義務があるのでした。

ダンジョンの1層入り口からわずか30歩、重厚な石積みの2階建ての建物、表には両手剣に竜の牙を型どった意匠が施された木製扉。まるでダンジョンから街を守るような佇まい、それが探索ギルドだ。

「ういーす。」

俺はその木製扉を空けつつ適當な挨拶をした。

中にいるのはむさいヒューマンのオッサンが4割、ゴツイお姉さんが1割、竜人族・獣人族・精霊族で5割といった感じだが、その大半がこちらをチラッと見ただけで興味を失ったように視線を戻す。俺たちのファミリーはまだまだ無名だからな。

「お、グランディラファミリーじゃねえか、お前らラノタウルスの討伐受けたんだってな。どううまく行つたのか？」

「あの面見たら失敗だつて分かるだろ。きっとまたストーカマスタークイーンに助けられたんだぜ。」

「ギャハハ、ちげえねえ。ボーヤも大変だわな『追跡の剣姫』に愛されて、ギャハハハハ。」

前言撤回、俺たちのファミリー（というか主に俺）は意外と有名で

ある。実力とは別の所で。

俺はこの手合いは無視することにしてる。相手にしても良い事つて何もないからな。

真っ直ぐカウンターに向かい、空いていた席に座る。

「探索ギルドへようこそ、どのようなご用件ですか？」

ギルドの受付は全員女性だ。名前は覚えてないけどな。  
え？ ハーレム作りたいなら女性の名前ぐらい覚えるべきだろ？  
ハーレム要員じゃないなんてどうでもいいんだよ。

「依頼の報告に来た。ラノタウルスの討伐、それとモンスターから  
のドロップ品だ。」

そう言って俺は依頼書を懐から取り出す。隣ではチールが道具袋か  
ら魔石とアイテムを幾つか取り出している。

「確認致しますので少々お待ち下さい。」

そう言ってアイテムをまとめて受付嬢は裏に下がる。  
それを待つてたように一人の妖精族の女性が声をかけてきた。

「やあ、ラノタウルス討伐に行ってたんだって？ 今の様子だとま  
く倒せたみたいだな。おめでとう。あれはフロアボスとしてもかな  
り強い方だと言う事はよく知っているよ。私もあるの討伐に行つた  
ことがあるからねえ。」

そう言って声をかけて来たのは妖精族のミリティットだった。相変わ  
らず派手な羽を持った細い女だ。いやここまで細いと骨だな、うん。  
俺基準で60点。俺はもつとこう肉付きが良くて、ほらこう腰かお  
尻の辺りが艶かしくないと、わかるな？  
ちなみに顔は80点である。頬肉が足りない。

俺があまりに全身を上から下までジロジロ観察したからだろう

「相変わらず君は無遠慮だよね。そんな目で私を見るのは君ぐらいだよ。」

ミコトットなどとは苦笑しながら、それでも隣に椅子を持つてくる。

「！」これは『銀羽の天女』様。うわあ、間近で初めて見ました。ほ、本当に綺麗で、で、です！

ああ、私は獣人族のチール。グランティラファミリーのサポートです。よ、よ、よろえ

「噛みすぎだ。全く、なんでこんな派手羽女に緊張するんだか。舌を出してハアハアしてると変態ぽいチールの姿（舌を噛んで相当痛かつたらしい）を呆れながら俺は見る。

「私の事を派手羽女とかいうのは君ぐらいだよ。全く非常識なのは君さ。まあ今はそんな事どうでも良くてだね、ラノタウルスどうだつたのさ？」

「じゃあ、派手羽＆骨女でどうよ？ ラノタウルスは、なんだ一瞬だつたよ。超弱かつた・・・うん、銀線がシュパシュパとなつてバラバラだな。」

どうだ、俺の的確な表現。分かりやすからう。

「なんだ、またミルちゃん来たのかい。ホントあの子もマメよねえ。世にも珍しい彼女のユニークスキル有効活用とも言えるけどさ。なんでこんな・・・まあ、顔は悪かないが、女を”褒める事”、ホント”褒める事も”出来ない、非紳士がいいんだか。となりのチー ルって子の方がよほど可愛い男だよ」

2回言いやがった。どうやら俺の論評はお気に召さなかつたらしい。しかし、二十歳の男に対して可愛いって褒め言葉か？

なんかチールは喜んでいるようだ。まあ獣人族は総じて可愛い種族ではあるな。耳と尻尾だし。

「分かつたらあつち行つてろよ。えと『銀羽の天女』様? ップ」「なぜ笑うかな、ホント失礼だね君は。神が付けたセカンドネームを笑う奴は、か、加護を失うんだぞ! ホントだぞ」

## 第一話（後書き）

主人公はバカ系です。一応ファミリーリーダーです。でも馬鹿です。

設定ちょっとだけ解説。

この世界では神様が普通暮らしていて、ファミリーとこうものを作ります。

小規模ギルドみたいなものですね。

神様1人に1ファミリー、人数はピンきりです。

神様は自分のファミリーのメンバーにセカンドネーム付「」とステータス更新を行えます。

あ、主人公の名前が出てなかつた。多分、次ぐらいで出てきます  
まだ神様出てこないかもしません。

## 第一話

えつと、俺の目的なんだっけ？少なくともこの派手羽女の相手ではない。

「はつ、うちの神様はそんな事で加護取り上げたりしねえよ。お前の所の神様は胸小っちゃいけどな。」

が、言われたら言い返すに決まっているだろ。それが世の中の摺理つてもんなのだよ。

「む、胸とか関係ないだろ？この変態が。ほんと君は人間的にダメだな。ホントダメだ。」

なぜか自分の胸の辺りを両手で隠しながら、”ホント”と”ダメ”を連発する派手羽女。こいつバカだよな、間違いない。でもムカつく、派手羽をビヨーンビヨーンしたくなる。

「お待たせいたしました。グランティラファミリーのカリキ様、ラノタウルスの報酬3万ギルダ、魔石・アイテムの換金が1万2千ギルダになります。ご確認ください。」

俺がどうしてやるか若干悩みつつ両手をワキワキしてる所へギルドの受付嬢が戻ってきた。

ふむ、思ったよりも換金が高い、ラノタウルスのドロップもあつたからか。倒したの俺たちじゃないけど。

「ありがと、ありがと。さてチール帰るか。」

俺は現金袋をひょいと持ち上げるチールに声をかけた。

「は、はい。それでは『銀羽の天女』様、失礼します。」

あれ、こいつまだ居たの？

「今のタイミングでムシなのか？ホントこのバカは、マジバカだか

「うう。

なんかブツブツ言つてるようだが放置した方が良いだろ。羽派手女の相手は時間の無駄である。

「じゃあな、派手羽。」

俺は一応別れの挨拶をして出口へ向かう。

「あー、もう。いちいちムカつくんだけど、分かったわよ。またね。」

そんな声を背後に俺とチールは探索ギルドを後にした、いや、しょうとした。

「はい。私”を”愛するマイダーリン、お疲れ様。丁度いいタイミングだつた？あなたはこれから暇でしょうから、私が食事でも付き合つてあげでいいわよ？」

いかにも偶然のように（待ち構えてたのは間違いないが）ひょっこり俺たちの前に現れたのは、15層でラノタウルスを瞬殺した女剣士『追跡の剣姫』ことミラヴィルニアだ。

竜人族の特徴である頭に2本と両肘に生えた角がダンジョンから出た後も凛々しさを際立たせている。

ちなみに顔は90点、若干目尻が釣り上がりすぎだと思つんだわ。体付きは40点、なんつか竜人族つて苦手なんだわ。トータル興味外、残念でした。

「あー、ミラヴィルニア。これが今回の討伐報酬の半分。一応手伝つてもらつたしな渡しておく。」

俺はそう言って、1万5千ギルダを袋から取り出し（1万ギルダコインと5千ギルダコインが一枚づつとお手軽だつた）渡そうとする。

「私”を”愛するマイダーリンはそんな事にまで気を使つてくれるなんて。ほんと優しいよね。でも大丈夫、それは『あ・な・た』のファミリーで使ってちょうだい。うちには必要ないから。」

別に俺は優しさで言つてるんじやなくて借りを作りたくないだけだ。そうでなくとも毎回毎回・・・

「あ、でもでも、どうしていつも言つたりあ、食事付き合つてあげるからご馳走してくれてもいいのよ?」

このパートーンだからな。

「いやいや、今日はこの後ファミリー・ホームに戻つてステ更新とか色々忙しいんだよ。だから報酬受け取れや、な?」

「あらあら、ダーリンはどうしても私と食事行きたいのこ、今日はダメで落ち込んでるの?なら仕方ないわね、明日時間作つてあげても構わなくてよ。」

誰もそんな事言つてない。その誘い方に落ち込むからやめれ。

「じゃあ、明日お昼の時に中央広場で待ち合わせね。じゃ、私”を”愛するマイダーリン、それまで寂しいと思つけど、今日はお別れね。」

一方的に言い残して、ミラヴィル・チエアは俺の目の前から一瞬で消えた。どうせ近くに隠れてこっちを観察してるんだが。

そして明日は待ち合わせと言いつつ、日の出ぐらいいからファミリー・ホームのドアの前で待ち構えているに違いない。最悪最凶の女である。

マジ怖いけど、この街でも最強の一角(個人) & 最強の一角である、あの女を下手に刺激してもあまり面白いことにならない。

経験つて大事だ。えーと、たぶん10回ぐらこの経験(ちなみに30回以上は経験してる)

「はあ、疲れたな。とつとと帰ろう、チール。」

「ははは、いつも大変ですね。でも、銀羽の天女』様、マジ可愛かつたなあ。僕もファンクラブ入っちゃおうかなあ。」

この世界はバカばかりである。俺以外。

## 第一話（後書き）

普人族・・・いわゆるヒューマンタイプ

竜人族・・・頭と肘に角が生えている種族、肌の色は茶色～極薄い緑  
獣人族・・・動物耳と尻尾は生えてる、種類は既存哺乳類ならほぼ  
網羅されている

妖精族・・・外見ほぼヒューマンだが背中に羽が浮いている（生え  
ているのではない）耳が若干尖っている個体も

基礎身体能力的には妖精族が飛べるぐらいで、種族差はあまりない  
(個人差は大きい)

スキルや魔法は種族ごとに多少偏りがある（絶対ではない）

次回は神様登場、ファミリーホームも、後はスキルとか？

誤字脱字などありましたら都度修正していきます。  
指摘・感想などもお待ちしています。

「やれやれ、毎度毎度ホームが遠いのはなんでだらうな。  
「ははは、実際遠いですからね。」

探索ギルドから疾走を初めてそろそろ20分。ようやく道程の2／3を消化した所だ。ちなみにホームはダンジョンから普通の人人が徒歩で3時間（20キロ）ほどの距離にある。あれ馬車使つたほうが良くな？

「やれやれ、馬車でも買つたほうがいいな。」

「はは、馬車だと10分ぐらいですからね。ただ馬の世話は大変ですよ。」

そう、生き物は放置しておく訳にはいかない、世話をする必要があるのだ。特に馬は繊細だ、放置するとすぐに体調を崩すからな。

そんな事をグダグダ話しながらホームまでの道程を走りきった。

「やあやあ、ようやくついた。愛しのマイホームよ。ちょっとボロいけどな。」

「それ言つちやダメですつて。とりあえず入つてくつろぎましょ。」

「石積みの堅牢だがちょっとボロつちい家にチールがテクテク入つていぐ。俺はチラツと後ろを見てからその後に続いた。

「おう、おかえりだ。意外と時間がかかったんだな。」

「中から真っ先に中性的で魅力的な声がかかった。」

「ただいま、神様。そして3日ぶりのマイホーム。」

「いいから、玄関先で叫んでないで入つてきな。君ら一人以外はもうステータス更新終わってるしさ。」

ステータスというのは自分の器に溜まった魔水（人は魔石モンスターを倒すとそこから漏れる魔力を液体にして体内にため込む性質が

ある）に神様の神力を混ぜて能力化し肉体に還元した結果を数値化したもののことだ。

それを神様はカードに書き起こしてくれる。ステータス更新はどうやるかというと背中から手を突っ込んで中をコネコネされてる感だ。この行為を一般的には”ステータスを練り込む”と言つ、一人10分程度。

「俺たちは”ばとるでーたー”を引き出しといて再生して楽しむついで、その褒美さ。」

との事で無償ではないらしい。が別に慣れてるし気にしていない。害ないしな。

まあ神様は超男前もしくは絶世の美女が大半、しかも多くが博愛主義（？）と最悪なので実害が多いにある、のだが・・・

「グランティラ様、先に僕のステータス更新して貰つてもいいでしょうか？」

チールは神妙な顔付きで俺に遠慮するよりおずおずと言つた。  
「いんじやないかな、リーダーは最後で。ほりおいで可愛がつてやるから。」

ちなみにこの超男前で中性的なグランティラという神様は男女どちらも対応可能である。

するなよ、という突つ込みは全く効果がない。このファミリー全員・  
・・いやなんでもない。

まあ嫌がる奴（俺とか）は何もないけどな。ないけどな！記憶もな  
いけどな！！

ふう目から変な汗が出てきたぜ。

「ふつふつふーん、つはつははーん」

早く防音室のあるホームへ移動したい。マジホントー。

「たらつらりらんらーん。チールはランクが上がった。」

突如、神様が大声を出した。

「つは？」「マジで！？」「やつた。」「おー」

誰が誰の反応でも別に構わないが、当たり前の反応とこいつよりは薄めだな。

ランクアップこれは一大イベントだ。

「神様、ホントですか、ホントにホントですか？」

「神様は嘘つけないんだよ。禁止条項だからね。ステータス書き起こすから少し待ちなつて。」

名称：チール 鍛冶っ子ちゅーちゃん

ランク：E D

体力：3 3

力：4 8

賢さ：5 3

器用さ：7 8

幸運：9 0

スキル：なし 抽錬鍛冶士LV1

鍛冶士の能力と共にEクラス魔石金属の生成を行う事が可能

魔法：なし

「はい、これが君の更新カードね。ちゅーちゃんって可愛くね？可愛いよね？らぶー」

「らぶー、じゃねえよ。この変態神様めが。

「やつた、本当に上がってる。え、しかもレアスキル！？本当に？鍛冶士のレアつて中々いないんですよね？ほんとー、凄い嬉しい。グランディラ様凄い、大好きですー。」

「注1：ステータスはどの神様が更新しても同じ結果が出るんで

すよ。」「

横でボソッと呟いたのはマーリッシュだ。この顔は後輩にレアスキルが発現したんで悔しいんだな。

「まあまあ、ついにうちのファミリーにも鍛冶士のスキル持ちが出たんだ。まずそれを喜ばうぜ。期待してたとはいえ狙つて発見させたんだしな。」

スキルは個々の適正・特性・願望がなんたらで、ランクアップするごとに1つ発現する。

狙つて発現する事は少ない（願望はあつても適正と特性がないと別の物になる）からな。

魔法はランクに関係なく突如使えるようになる事が多い。こつちは性格に依存しているらしい。生涯通じて使えない人が最も多く、2つまで覚える可能性がある。

俺はスキル1つに魔法1つだ。

さて、次は俺のステータス更新だな。そろそろランク上がらないだろうか。

## 第三話（後書き）

ステータスはランク毎に0～100で表されます。

ランクアップは必要な数値というのはなく、個々において何かブレイクスルーがあつた時に上昇します。

チール君の場合はラノタウルスの魔石を取り出した事がキッカケ。ランクが上がると各数値はほぼ1／10になりますが能力的には大幅に上昇しています。

次回、主人公のステータスとセカンドネーム公開予定

ストーカー（美少女）とダンジョンの出番がないな・・・

バイな神様は次回も活躍？

更新は書けた時に、ということで結構ランダムです、申し訳ありません。

誤字脱字の指摘やその他感想などもお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9258y/>

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

2011年11月29日11時46分発行